○　直己のマンション・書斎（夜）

机に向かって万年筆で原稿を書いている作家・村川直己（48）。

デスクライトや間接照明が灯る薄暗い部屋。窓から高層ビルの夜景が見える。

原稿の最後に〝了〟の文字を書き、万年筆を置き、原稿をきれいに束ねて机の上に置く。机の時計を見る。夜6時を過ぎたところ。机の抽斗を開ける。

×　　×　　×

抽斗の中に「麻子へ」と書かれた封筒と何も書かれていない封筒がある。

×　　×　　×

何も書かれていない封筒を取り出し、机に置く。封筒に「遥子へ」の文字を書く。

その封筒を着ているジャケットの内ポケットに仕舞う。

立ち上がり、戸棚へ歩く。戸棚からウィスキーを取り出し、グラスに注ぎ、口にする。戸棚から薬瓶を手に取り、錠剤（睡

眠薬）を手のひらにたくさん出して口に放り込み、ウィスキーで流し込む。
電話台へ歩き留守電の再生ボタンを押す。
遥子の声「今夜９時くらいに原稿取りに伺います。今日は軽く鍋でもどうかしら？材料買っていくから待っていて下さい」
窓際に立ち、じっと夜景を眺めてから、覚悟を決めた顔をしてグラスを飲み干す。

○　出版社・オフィス・部長室

書籍部・編集者・水野遥子（39）と書籍部部長の須藤（45）がソファに向かい合って座っている。
須藤「木内先生の取材旅行はどうなってる？」
遥子「（スケジュール帳を見ながら）来週京都へ同行する予定です」
須藤「そうか……芸者あげてどんちゃん騒ぎしないよう見張っててくれよ」
遥子「はい。そのために私に行かせるんでしょう。部長、自分じゃ断れないから」

須藤「（苦笑）バレたか……」
遥子「先生には、ついでに雑誌の取材を受けて頂く予定です。京都を特集した雑誌の巻頭インタビューで」
須藤「相変わらず抜かりないな」
遥子「えぇ。だって、会社の経費で行くんですから、それなりに働いていただかないと」
須藤「それから……村川先生は最近どうだ？確か、もうそろそろ最終稿があがる頃じゃないのか？」
遥子「えぇ。今夜、取りに伺う予定ですけど」
須藤「そうか……。（声を落として）ところで……（言いよどむ）あれから、先生とはどうなってるんだ？」
遥子「もうその話はしない約束でしょ」
須藤「そうだけど……いいのか、いつまでもその状態で？……だって、先生はもう別居して長いんだし、離婚だってそろそろ成立するだろ？」
遥子「部長は、そんなに私に結婚させたいん

ですか？」

須藤「そりゃぁ、俺が口を出すことじゃないとはわかっているけど……でも、水野さえよければ、先生は結婚するつもりじゃないのか？」

遥子「いいんです、私は今のままで。編集者として、先生にいい作品を書いてもらえれば、それでいいんです。もう、この話はおしまい。（腕時計を見て）じゃ、私、これから先生のところへ原稿取りに行きますから」

立ち上がり、部長室を出て行く遥子。

ため息ついて見送る須藤。

○　直己のマンション・外観

○　同・外の歩道

スーパーの袋を手に提げ、マンションのエントランスに入っていく遥子。

○　同・玄関・外

表札に「村川」の文字。
インターホンを鳴らす遥子。応答なく、
鍵をバッグから取り出して開けて入る。

○　同・リビング

電気をつけて入ってくる遥子。
リビングに隣接した書斎のドアが少し開
き、明かりが洩れているのに気づく。
遥子「？……直己さん？」

○　同・書斎

書斎をリビングから覗く遥子。
遥子「直己さん……？」
扉をさらに開けて中に入る遥子。
遥子「！……（サッと青ざめる）」
手に持っていたバッグ、スーパーの袋を
どさっと床に落とす。
遥子の視線の先に、首を吊った直己の体
が見える。

遥子「！……（手で口を押さえる）」
救急車の音、先行して――。

○　救急車の赤いライトが走る

○　救急病院・霊安室

直己の遺体が横たわっているベッドが中央に置かれている。その枕元に座り、呆然と直己の顔を見つめている遥子。
ドアをノックして警官が入ってくる。
警官「あの、奥さんでいらっしゃいますか？」
遥子「（立ち上がり）いえ……」
警官「じゃあ（と封筒を見て）遥子さんというお名前では？」
遥子「（怪訝な顔で）はい、そうですけど……」
遥子に近づき封筒を手渡す警官。封筒を手に取る遥子。宛名に『遥子へ』の文字。
遥子「！……」
警官「それ、村川さんのジャケットの内ポケットに入っていました」

遥子「そうですか……」
警官「じゃ、私はこれで」
遥子「ありがとうございました」
霊安室から出て行く警官。
椅子に腰を下ろし、ぼんやりと封筒を見つめる遥子。直己の顔に目をやってから、封筒から手紙を取り出す。手紙を読み始め、最後まで読んで、顔を上げ、直己の顔を見つめる。次の瞬間、手紙を破ろうとするも、手紙をぎゅっと握りしめる。
遥子「……」
とその時、ドアをノックする音。
遥子「！（ドアの方に顔を向ける）」
ドアが開き、先ほどの警官が入ってくる。
遥子「（立ち上がり）まだ、何か……？」
警官「いえ……。（言いにくそうに）ただ、村川さんのご家族がもうすぐこちらに到着すると連絡がありましたので……」
遥子「そうですか……じゃ、私はもう出ます」
警官、目礼して静かに部屋を出る。

見納めするかのようにじっと直己の顔を見つめる遥子。直己の顔に手を伸ばし、髪を直し、頬をそっと撫でる。

遥子「――直己さん……」

頬の涙を指先でぬぐい、思いを振り切るように直己に背を向け、霊安室を静かに出て行く遥子。

○　救急病院・廊下

しんとして人気のない薄暗い廊下を遥子がゆっくりと歩いてくる。

と、前方から直己の妻・麻子（43）と息子（中学生）が小走りで歩いてくる。

うつむいて歩く遥子とすれ違う麻子。

麻子「！……（ハッとして遥子の顔を見る）」

遥子「（うつむいて麻子に気づかない）」

ふっと立ち止まり、振り返る麻子。

歩き去る遥子の後姿を見つめる。

麻子「……」

先をゆく息子が立ち止まり、

息子「お母さん、どうしたの？」
麻子「（息子に振り向き）うぅん、何でもないの（と小走りで息子に追いつく）」
息子の横で歩きながら、何か考え込んでいる表情の麻子。

○　直己の通夜会場の寺・表（日替わり・夜）
村川直己の名前が書かれた立て看板。
参列者が次々と門から中に入っていく。

○　同・中
祭壇に飾られた村川の遺影。
親族席に座り参列者に一礼をする喪服姿の村川の妻・麻子と息子と親族。
とその時、焼香するため並んでいる参列者の中に遥子の姿を見つける麻子。
麻子「！……」
遥子の番になり、親族席に一礼して、焼香し手を合わせる遥子。顔を上げて少し長く村川の遺影を見つめる。

そんな遥子をじっと見つめる麻子。

○　同・外

通夜会場から出てくる遥子。
少しあとから慌てて出てくる麻子。
遥子の後姿を見つけ呼び止める。

麻子「水野さん！」

遥子「（立ち止まって振り返る）？！……」
遥子に近づいてくる麻子。

麻子「わたくし、村川の妻の麻子と申します」

遥子「！……（一礼する）」

○　同・中

人気のない和室の控え室。
麻子と遥子が正座して向かい合っている。

麻子「昨日、あのマンションを整理していたら、あなたの写真が出てきてね（バッグを膝の上にのせて開ける）」

遥子「……」

麻子「日記とか証拠になりそうなものはすべ

て処分したみたいなんだけど、（バッグの中から一冊の本を取り出し、その中に挟まれた一枚の写真を取り出し、遥子の前に差し出して）これだけは忘れたみたいなの」

遥子「（写真を手に取り）！……」

×　　×　　×

遥子の写真。

×　　×　　×

麻子「（手にした本を差し出し）この本に挟まれていたわ。……たしか、これ何かの賞をとった本よね？」

遥子「はい……」

麻子「きっとあなたとの思い出の本でしょうから、これもついでにもらってちょうだい」

目礼して本を受け取る遥子。

麻子「呼びとめた理由はこれだけじゃないのよ。……水野さんには一度ちゃんとお礼を言っておかなくちゃと思っていてね……」

遥子「――」

麻子「主人の最期を看取って下さったの、水

野さんでしょう？」
遥子「――」
麻子「あの日、病院の廊下で、私、あなたとすれ違ったのよ。あなたはうつむいて歩いていたから、私に気づいていなかったみたいだけど」
遥子「……そうでしたか……」
麻子「看取るといっても、あんな死に方じゃね……。あなたを第一発見者にするなんて、相変わらず勝手がいいわね、あの人も」
遥子「――」
麻子「とにかく、あんな死に方に立ち合わせてしまって、ごめんなさいね」
遥子「いえ……」
麻子「それと……もうひとつ、あなたに言っておきたいことがあるのよ」
遥子「――（身構える）」
麻子「もう別居してずいぶん経つのに、主人がなかなか離婚しないのは私のせいだと思っていたんじゃない？」

遥子「――」
麻子「でも、ほんとのことを言うとね。離婚したがらなかったのは主人の方なのよ」
遥子「!?……」
麻子「うちの子供の話は聞いてるかしら？」
遥子「はい……たしか息子さんが二人いらっしゃるって――」
麻子「そう……それで、下の子の話は聞いてるかしら？」
遥子「いえ……」
麻子「そう……やっぱり話していなかったのね。……実は下の子、亮介っていうんだけど、生まれたときから重い心臓の病気を抱えていてね、病院に出たり入ったりなの」
遥子「――」
麻子「亮介が病気だと知って、お姑さんや彼の親戚は、『嫁の体が悪いからだ』って、私のことを責めたんだけど、主人はそんな私をずっとかばってくれたわ。でも、そのうち亮介の看護に明け暮れる日々が続くよう

になって、主人が家に帰らない日が増えていったわ。きっと、家にいるのが息苦しくなっていったんでしょうね……」

遥子「――」

麻子「亮介のことが直接の原因ってわけじゃないけど、主人と私の関係もその頃から冷めていったわ。だから私、慰謝料もらって、子供の養育費や病院代もらえれば、もう別れてもいいわよって言ったんだけど、あの人……『亮介は俺が死ぬまで俺の子だから、離婚はしない』って言い張って……」

遥子「――」

麻子「主人はね、中学の頃、お父さんが家を出て行ってしまって、苗字も母方の姓になって学校で辛い思いをしたらしいの……。だから、自分の子供たちにそれだけはさせたくなかったみたい。それで、こうして別れずにきてしまった、というわけ」

遥子「――」

麻子「でも、不思議なのよね……。主人とは

とっくに別居生活をして、形だけの夫婦になってしまって、愛人だろうとなんだろうと、あんな人、熨斗つけてくれてやるわ、なんて思っていたくらい、もう何の未練もなかったはずなのに……こうして死なれると……あの人のいい所ばかり思い出されてね……。亮介が赤ちゃんだった頃、銀座かどこかで飲んで夜遅く帰ってきたことがあったの。私が夜泣きする亮介を抱いていたら、あの人、酔ってるのに自分が抱くって言い張って、畳の上であぐらかいて、亮介をこうやって抱いてね（仕草をまねして）……泣き止むまでずっと抱いていたの」

遥子「――」

麻子「その少し揺れてる背中を後ろから見ていたら、何だかぐっと胸にきちゃってね……あぁ、あの人なりにこの子を愛してくれているんだなぁって。そしたら、外に女の人がいることも、家にあまり帰って来ないことも、何だかどうでもよくなっちゃって

……。ずるいのよね、あの人のそういうところ……」

遥子「――」

麻子「実を言うとね、主人と別居するようになってから、私にも、他にお付き合いする男性が出来たの。彼のことを好きではあるんだけど、それとは違う感情で、私はやっぱり主人のことが、世の中の男性の中で一番好きだったんだなぁって、今になって思うのよ」

遥子「――」

とその時、控え室の外の廊下を歩く足音が聞こえ、直己の娘・百合が戸口に立つ。

百合「お母さん、叔父さんが呼んでるけど」

麻子「（百合に）今、行くわ。（遥子に）引き留めてしまってごめんなさいね。ここで、失礼するわね。（立ち上がろうと膝をつき）あ…、明日は午後三時に出棺なの。もしよかったら、最後に見送ってあげてちょうだい。あの人もきっと喜ぶだろうから」

遥子「いえ……私はこれで……」
麻子「そう……。じゃ……（一礼して立ち上がる）」
遥子「（一礼する）」

○　出版社・オフィス（昼）

テロップ「1ヶ月後」
机に頬杖をついて何か考え込んでいる表情の遥子。コーヒーカップがすっと遥子の前に置かれる。ハッとして見上げる遥子。部長の須藤が心配そうに見ている。
須藤「大丈夫か……何だか顔色が悪いぞ」
遥子「えぇ……大丈夫です」
須藤「さっきから、ずっと頬杖ついたまま動いていなかったぞ」
遥子「すみません」
須藤「今日は吉岡先生と打ち合わせじゃなかったか？」
遥子「（手帳を見て）えぇ、そうです」
須藤「少し早めに出て外の空気を吸ってきた

らどうだ？（小さな声で）机でぼーっとされちゃ、若いもんに示しがつかないからね」
ハッとして周りを見る遥子。
遥子から慌てて目を逸らす若い部下たち。
遥子「すみません……じゃ、お言葉に甘えて行ってきます」
バッグにスケジュール帳やファイルを入れ、立ち上がりオフィスを出て行く遥子。
心配そうに見送る須藤。

○　ホテル・外観

○　同・ロビー

入ってくる遥子。ロビーを通り抜け、エレベーターホールに向かう。
ふっと足をとめる。めまいがして、吐き気を覚え、口を手で押さえる。
怪訝な顔して、すれ違うホテルの客。
目で洗面所の表示を探し、足早に向かう。

○　同・洗面所

血の気の引いた顔で足早に入ってくる遥子。洗面台にかがみこみ、吐き気を催す。水を流し、鏡に映る自分の顔を見る。

○　病院・外来待合室

ソファがたくさん並び患者が待つフロア。そのソファの一つに座っている遥子。

看護婦「水野様」

遥子「……（気づかない）」

看護婦「水野遥子様、いらっしゃいますか？」

遥子「（我に返り）あ、はい（立ち上がる）」

看護婦「５番の診察室にお入りください」

遥子「はい……（バッグを持って向かう）」

○　公園

広い芝生の周りを木々と遊歩道が囲んでいる大きめの公園。

遊歩道を歩き、芝生周りに置かれたベンチの一つに腰を下ろす遥子。

少し離れたベンチにスーツを着たサラリーマン・永井裕之（39）が座っている。
幼稚園の子供たちが引率の先生に連れられ、芝生にやってくる。
元気に走り回り、笑い声の聞こえる子供たちを、複雑な表情で見つめる遥子。
お腹にそっと手をあてる。

×　　×　　×

〈フラッシュ〉

病院・外来診察室。

医師「水野さん、妊娠していますよ」

医師「だいたい4週目くらいですね……もう一週間様子を見た方がいいとは思いますが……たぶん間違いないと思いますよ」

×　　×　　×

遥子「……（ベンチの背にもたれ、大きく息を吸い目を閉じる）」

男の声「あの……すみません……」

ハッと目を開ける遥子。

ベンチの前に永井裕之が立っている。

遥子「？……（身構える。怪訝な顔）」
裕之「あの……もしかして、水野さんじゃありませんか？」
遥子「！……（ますます警戒）」
裕之「あの……僕、永井裕之といいます。大学の登山サークルで一緒でした。覚えていますでしょうか？」
遥子「……（思い出す顔をして、考え込む）」
裕之「水野さんは文学部で、僕は経済学部だったから、学部は違いますが……」
遥子「……あぁ……」
　ようやく反応を見せた遥子。
裕之「思い出してもらえましたか？」
遥子「えぇ……」
裕之「あぁ……よかった、思い出してもらえて。でないと怪しいナンパみたいに思われちゃうから……（はにかむように小さく笑う）」
遥子「……（あまりよく覚えていないが、いい人らしい、という思いで、裕之を見る）」

裕之「……隣り、いいかな？（目で遥子の横を指す）」
遥子「えぇ……どうぞ（少し横にずれる）」
　遥子の隣りに腰をおろす裕之。
裕之「……元気だった？」
遥子「えぇ……永井くんは？」
裕之「まぁ何とか……」
遥子「たしか永井くんは……銀行に就職したんだっけ？」
裕之「そう……そして、いまだ独身。水野さんはたしか出版社だったよね？（視線が遥子の左手に落ちる）」
遥子「（裕之の視線に気づいて）そう……そして同じく、いまだ独身。（結婚指輪のない左手を見せて、フフと小さく笑って）親不孝者です」
裕之「ハハ……それはこっちも同じだよ」
　とその時、裕之の携帯が鳴る。
裕之「（ポケットに手を入れながら）ごめん、ちょっと……」

携帯を手にして立ち上がり、遥子から少し離れた場所へ移動する裕之。
しばらくして、戻ってくる。
裕之「ごめん、話の途中で……」
遥子「ううん（小さく首を振る）」
裕之「これから得意先のところに行かなきゃいけないから、悪いんだけど今日はこれで……（スーツのポケットから名刺入れを取り出す）これ、よかったら（名刺を差し出して）気が向いたときにでも電話して……」
遥子「（受け取りながら）ありがとう……（少し戸惑いの顔）」
裕之「じゃ、また（立ち上がる）」
遥子「うん……」
立ち去る裕之。見送る遥子。
少し歩き出してから急に足を止め、振り返り遥子に手を振る裕之。
遥子「！……（フフと微笑して手を振り返す）」

○　遥子のマンション・リビング（夜）

ソファに座り、手にした裕之の名刺を見つめて何か考え込んだ表情の遥子。電話の子機を取り、裕之の名刺を見ながら電話をかける。しばらくして呼び出し音が鳴る。裕之は出ない。裕之が出ることを待つ遥子。あきらめかけた時つながった。

裕之（声）「はい」

遥子「あの……水野ですけど――」

裕之（声）「！水野さん？……うれしいなぁ、こんなに早く電話をもらえるなんて……。僕の名刺は渡したけど、君の電話番号は聞いていなかったから、あのまま、また音信普通になっちゃうのかなって思っていたところだったんだ……」

遥子「あの……実は、ちょっとお願いがあるんだけど、今度の日曜日にでも会ってもらえないかしら……」

裕之「日曜？……いいよ」

○　喫茶店・中（昼）

窓際の席に座り、窓の外をぼんやり見ている遥子。
テーブルに近づいてくる裕之。
裕之が来たことに気づく遥子。
裕之「ごめん。遅くなって」
遥子の向かいの席に座る裕之。
遥子「こちらこそ、日曜日に呼び出したりしてごめんなさいね」
裕之「いやぁ、こちらこそ、こんなに早く水野さんから電話をもらえるなんて思っていなかったから嬉しいよ。それに、白状しちゃうと……日曜の昼間に約束があるなんて久しぶりだから」
注文を取りにくる店員。
裕之「(店員に) コーヒーで」
店員が立ち去るのを待って、
裕之「それで……この前、電話で言ってたお願いって何……?」
遥子「えぇ……あの……(言いよどむ)」
バッグから紙を取り出し、裕之の前に差

し出す。
遥子「言いにくいことなんだけど、できれば、これにサインしてもらえないかと思って」
差し出された紙を手に取る裕之。
裕之「(紙を開いて)！(つぶやく)中絶同意書……？」
遥子「そう……実家に帰って親に頼むわけにはいかないし、周りの人には知られたくないから――」
裕之「それで、僕に……？」
遥子「ごめんなさい……。卒業以来初めて再会して、まだたいした話もしていないのに、こんなこと、急にお願いして……。勝手がいいのはわかっているんだけど……でも、お腹の子は日に日に成長していくし、切羽詰ってて……」
裕之「――(表情を変えず、紙をじっと見て考え込んでいる)」
遥子「……(何も言わず黙り込んだ裕之を言葉なく見つめるしかない)」

ようやく、裕之が顔を上げる。
裕之「一つ聞いていいかな？」
遥子「……えぇ」
裕之「お腹の子の父親ってどんな人なのか教えてくれないかな。堕ろそうとしている子なんだから、色々と事情のある人なんだろうけど」
遥子「……聞いてどうするの？」
裕之『子供はあの世から親を選んでこの世に生まれて来る』って話、聞いたことない？」
遥子「……」
裕之「もし、中絶に同意するとなると、その子がせっかくその親を選んで生まれてくることを決めたのに、そのまま、あちらの世界へ返さなくちゃいけないことになるだろう。……だったら、せめてお腹の子が、どういう親を選んでこちらの世界に来ようとしていたのか知らなくちゃ、失礼なんじゃないかと思ってさ」
遥子「（どう話そうか考え、間を取ってから）

……父親は……私が担当していた作家だったの、奥さんも子供もいる人……。だから、結婚は最初から望んでいなかった。ただ、彼がいい作品を書けるよう、編集者として、彼を支えていければいいと思っていたの。

――でも、この前、その彼が自殺したの…」

裕之「！……（息をのむ）」

遥子「末期のすい臓がんだったらしいの。彼、私にも別居している家族にも、そのことを黙っていたみたいで、私宛ての遺書に『がんがこのまま進行して、寝たきりになって、人の世話になるのはいやだから、自分で体を動かせるうちに、自分の人生の幕引きをしたい』って書いてあったの……」

裕之「――」

遥子「自分で幕引きするなんて、あの人らしいとは思うんだけど……こうして彼に死なれるとね……彼にとって私は何だったのかなぁって考えちゃって……。自分では、たとえ結婚していなくても、公私ともに支え

ているつもりだったけど、結局、彼の生きる支えにはなれなかったことが今さらながら堪えるわ……」
裕之「――」
遥子「ごめんなさい……何かしんみりしちゃったわね」
裕之「いや……辛いことを思い出させてしまって悪かった（一礼する）」
遥子「（少しドライな口調で）そういうわけで、今は、死んだ男の子供を身ごもっているってわけなの。（お腹に手をあてながら）この子を産んで一人で育てられないわけじゃないけど……この子がこの世に生まれてきてほんとに幸せなのか自信が持てないのよ」
裕之「――あの……（紙を手に取り）今日はこのままこれを持ち帰らせてくれないかな？ほら……今日は印鑑も持っていないし……」
遥子「いいけど……」
裕之「（紙をジャケットの内ポケットに仕舞い

ながら）明日はちょっと忙しくて会えないけど、明後日なら都合がつくから」
遥子「そう……じゃ、お願いします（一礼）」
裕之「じゃ、またあとで電話するから」
立ち上がり、店を出る裕之。
遥子「……（裕之の背中を見つめる）」

○　道

考え込んだ表情で、人波を縫うように歩いている裕之。道沿いの本屋の看板にふっと目を留め、店の中に入っていく。

○　本屋・中

入ってくる裕之。
何か探している顔で本棚を見ながら歩いている。『法律書』と書かれた札のコーナーで立ち止まる。『わかりやすい民法／家族法』などと書かれた背表紙の本を手に取り、中を開いて立ち読みする。

○　喫茶店・中（日替わり・昼）

窓際の席に座り、落ち着かない様子で窓の外を見ている裕之。

中に入ってくる遥子。

遥子「！（先に裕之が来ていることに驚く）」

テーブルに近づいてくる遥子。

遥子が来たことに気づく裕之。

遥子「ごめんなさい、お待たせして……」

裕之「いや……僕が約束の時間より早く着きすぎただけだから」

裕之の向かいの席に座る遥子。

注文を取りにくる店員。

遥子「（店員に）レモンティーで」

店員が立ち去るのを待って、

遥子「この間はどうもありがとう。それで……例の紙にサインしてもらえたかしら？」

それには答えず、紙を遥子に差し出す。

少し当惑した顔で裕之から目を逸らし、

差し出された紙を手に取り開く。

遥子「！……（顔色が変わる）」

×　　×　　×

婚姻届の用紙。

すでに裕之の名前等が記入されている。

×　　×　　×

遥子「(顔を上げ)これ、どういうこと……?」

裕之「(少し緊張した面持ちで)――僕と結婚してほしい。僕をお腹の子の父親にさせてくれないか?」

遥子「ちょっと待って!何を言ってるの。私、そんなこと頼んでない」

裕之「唐突なのはわかってる。でも、気持ちは……ほんとだ」

遥子「父親にさせてくれだなんて軽々しく言わないで。私たち、この前再会したばかりで、お互いのこと何も知らないのよ」

裕之「それは、わかってる――」

遥子「自殺した男の子供を身ごもっているなんてって、陰で笑い者になるならまだしも……、同情されて憐れまれる方が何よりも辛いわ。――ごめんなさい。この間の話は

なかったことにして」
立ち上がり、急いで店を出て行く遥子。
裕之「！（立ち上がる）」
立ち去る遥子の後ろ姿を見つめ、遥子が店を出てから、椅子にどさっと座り込む。
突然思い立ったように立ち上がり、あわててレジで勘定を済ませ、店を出る。

○　歩道

行き交う人を交わしながら、遥子の姿を探し、走る裕之。
×　　×　　×
裕之の前を、人波を縫うように歩く遥子。
×　　×　　×
裕之の視線の先に遥子と思われる背中が見え隠れしている。
裕之「！（遥子の背中を見つける）」
その背中を追う裕之。
×　　×　　×
遥子に追いつき、その腕をつかむ裕之。

驚いて振り向く遥子。
遥子「！……」
裕之「（遥子の目をまっすぐ見て、少し強い口調で）僕の話はまだ終わってない」
遥子「！……（裕之の強い口調に驚いて）」
裕之につかまれた腕に目を落とす遥子。
裕之「！（遥子の視線に気づき、気まずく）あ、ごめん……（と手を離す）ちょっといいかな？（目でこちらへ行こうと合図）」
小さな公園へ続く道に入っていく二人。

○　小さな公園

ブランコや滑り台があるだけの、こじんまりとした公園。誰もいない。
入ってくる裕之と遥子。
立ち止まり、遥子の方へ振り向く裕之。
遥子も立ち止まり、裕之を見る。
裕之「（ポツリと）えっと……何から話せばいいかな……」
遥子「……」

裕之「確かに、僕たち大学卒業以来、一度も会っていないし、突然プロポーズするなんて驚いたとは思うけど、……実は大学時代、君に密かに好意を持っていたんだ。ほんとはあまり登山なんて興味なかったけど、君がいたから登山サークルにも入った。……でも、君は門倉先輩と付き合っていたし、僕みたいに地味で目立たない男が出る幕はなかったしね……。だから、卒業とともに、君のことはだんだん忘れていった」

遥子「――」

裕之「社会人になって、付き合った女性も何人かいたし、見合いもしたけど、一緒に人生を歩みたいって思える女性にはなかなか巡り会えず、この年までできてしまった。そしたら、この前、君と再会して、君がまだ独身だと知った。あの時は名刺を渡しただけだったけど、この再会を機に、できることなら君とお付き合いして、いずれは結婚したいって直感的に強く思ったんだ。そん

な気持ちになったのは初めてのことだったから、自分でも驚いたけど……」

遥子「――」

裕之「そして、おととい君とまた会って、お腹の子供のことを告げられた。……正直言って、最初はショックだったけど、君と結婚したいという気持ちに変わりはなかったし、だったら、僕がお腹の子供の父親になればいいと思った。法律で、婚姻した日から二〇〇日後以降に生まれた子供は嫡出子とみなされるそうなんだ。だから、今結婚すれば、僕は戸籍上もお腹の子供の父親になれる」

遥子「――」

裕之「君は父親になるなんて軽々しく言うなんてって言ってたけど、子供の戸籍のことも含めて僕なりによく考えた結論だよ。だから……もう一度考え直してみてほしい」

遥子「――（何も言えず、裕之を見つめる）」

裕之「（言いたいことを言い終わり、ほっとし

て大きく息を吐く）えーっと……僕が言いたかったのは、以上……（急に手持ち無沙汰になった感じ）引き留めて悪かった……じゃ……（ぎこちない雰囲気で立ち去る）」

遥子「……（立ち去る裕之の背中を見つめる）」

○　遥子のマンション・リビング（夜）

職場から帰ってきた遥子が部屋の明かりをつけ、バッグをテーブルに置き、ソファに身を投げ出すようにどさっと座る。

玄関のチャイムが鳴る。

立ち上がり、インターホンの前へ歩く。

遥子「（ボタンを押して）はい」

インターホン越しに、

配達員の声「お届けものです」

○　同・玄関

ドアを開ける遥子。

配達員から花束を差し出される。

○　同・リビング

花を抱えて入ってくる遥子。花をテーブルに置き、花の中のカードを手に取る。

『水野遥子様（差出人）永井裕之』の文字。カードを開く遥子。

裕之の声（カードの内容を読み上げる）

『昨日は驚かせてすまなかった。でも、君と結婚したい気持ちに変わりはない。

ところで今日は、結婚後の生活について少し話したいと思う。

結婚しても仕事は続けてもらって構わないよ。むしろ続けて、これからも、いい本を世に送り出してほしいと思っている。二人一緒に三度の食事をとることは難しいだろうけれど、出来るだけ同じものを同じ時間に食べ、一緒に過ごす時間を持つことを心がけたいと思っている。君はどんな結婚生活を望んでいるだろうか。今度会った時に聞かせてほしい。』

遥子「……（カードを見つめ考え込んだ表情）」

○　同・リビング（日替わり・夜）

職場から帰ってきた遥子が部屋の明かりをつけ、バッグをテーブルに置き、ソファに座る。裕之から贈られたテーブルの花に目をやる。玄関のチャイムが鳴る。立ち上がり、インターホンの前へ歩く。

遥子「はい」

○　同・玄関

ドアを開ける遥子。

配達員から花束を差し出される。

遥子「！」

○　同・リビング

テーブルに裕之から贈られた花束が２つ置かれている。

ソファに座ってカードを読む遥子。

裕之の声（カードの内容を読み上げる）

『今日は、生まれてくる子供の名前を考えて

みた。男の子なら裕太、女の子なら遥（はるか）っていうのはどうかな？
　たとえ血がつながっていない子供でも、精一杯の愛情を注ぎ、時には厳しく育てていきたいと思っている。
　いつの日かお腹の子供が、僕と血がつながっていないことを知る日が来るかもしれない。そのときは正直に話すつもりだ。そして僕の母にも。でも、今はまだ、その時ではないと思っている。だから、お腹の子のことはしばらく二人だけの秘密にしておきたいけど、君はどうだろうか？』
遥子「……（カードを見つめ考え込んだ表情）」

○　同・リビング（日替わり・夜）

　玄関のチャイムが鳴る。
遥子「！（もしかしてまた？……）」

○　同・玄関

　ドアを開ける遥子。

配達員から花束を差し出される。
遥子「！」

○　同・リビング

ソファで裕之からのカードを読む遥子。
裕之の声（カードの内容を読み上げる）
『けんかは大いにしよう』
遥子「！（思わず小さく吹き出して笑う）」
裕之の声（カードの内容を読み上げる）
『君はお互いのことをよく知らないのに結婚なんてできないと言っていたけれど、これから少しずつ知っていけばいいと思う。そのためには、お互い思っていることは我慢せず、その都度ぶつけていけばいい。
　世の中、互いの価値観が異なることを理由に別れる夫婦もいるけれど、僕は人間なんだから、価値観が違って当たり前だと思っている。むしろ、違うからこそ面白いと思っている。だから、けんかは大いにしよう。』
遥子「……（フフと穏やかな微笑を浮かべる）」

○　同・リビング（日替わり・夜）

玄関のチャイムが鳴る。

遥子「！（もしかしてまた？……）」

○　同・玄関

ドアを開ける遥子。

配達員から花束を差し出される。

遥子「！」

○　同・リビング

ソファで裕之からのカードを読む遥子。

裕之の声（カードの内容を読み上げる）

『今日は、君にとって、どんな夫でありたいか話してみたい。

たしかに、君は一人でもきっと立派に子供を育てていくことができると思う。でも、いくら強い君だって、時には誰かにふっと寄りかかりたくなることがあると思う。そんな時に「寄りかかっていいよ」と言えるように、

君のそばにいて、君の味方となり、君が頼ることのできる夫でありたいと思っている。』
遥子「……（カードを見つめ考え込んだ表情）」

○　同・リビング（日替わり・夜）

玄関のチャイムが鳴る。
遥子「！（もしかしてまた？……）」

○　同・玄関

ドアを開ける遥子。
配達員から花束を差し出される。
遥子「！」

○　同・リビング

ソファで裕之からのカードを読む遥子。
裕之の声（カードの内容を読み上げる）
『今度の日曜日、君と再会した、あの公園で午後一時に待っている。確かに再会したばかりで結婚だなんて普通じゃないことはわかっている。でも、もし、僕と結婚してもいいと

思う気持ちが１％でもあるなら、どうか来てほしい』

遥子「……（カードを見つめ考え込んだ表情）」

顔を上げ、部屋のあちこちに飾られた裕之からの花々を眺め回す。

○　公園（昼）

広い芝生の周りを木々と遊歩道が囲んでいる大きめの公園。

日曜の午後、家族連れが芝生にレジャーシートを敷き、お弁当を食べたり、子供たちが遊んだりしている。

芝生から少し離れたベンチに座り、遊んでいる子供たちを見ている裕之。

ちらっと腕時計を見る。午後一時少し前。

あたりを見回し、遥子の姿を探す。

○　遥子のマンション・リビング

掃除機をかけている遥子。

ふっと壁の時計を見上げる。午後一時過

ぎ。テーブルに飾られた裕之からの花に目をやり、掃除機を再びかける遥子。

○ **公園**

芝生にいる家族連れのうち一部が帰り支度を始める。ベンチに座り、空を見上げ、大きくため息をつく裕之。

腕時計を見る。午後三時過ぎ。

○ **遥子のマンション・キッチン**

シンクを磨いて掃除している遥子。ふっと手を止め、壁の時計を見る。午後三時過ぎ。テーブルに飾られた裕之からの花に目をやり、再びシンクを磨き始める。

○ **公園**

日が陰り、人影がまばらになってくる。

ベンチに座り、携帯を服のポケットから取り出し、ボタンを押す裕之。

携帯の画面に「水野遥子」の表示。

通話ボタンを押せず画面を閉じ、大きくため息をつく裕之。

○　遥子のマンション・リビング

窓際に立ち、暮れゆく空を見つめる遥子。手には裕之から贈られたカード。部屋の中に向き直り、リビング・ダイニングに飾られた花たちを見る。壁の時計を見る。午後４時過ぎ。急に思い立ったように、エプロンを外し、鏡の前で髪を直し、急いで部屋を出る。

○　通り

遥子、手を上げ、タクシーを止める。

○　公園前の通り

タクシーを降り、公園への道を走って中に入っていく遥子。

○　公園

芝生周りの木々に隠れるように立つ遥子。
芝生で小学生の男の子たちがサッカーボールで遊んでいる。
裕之の姿を目で探す遥子。
遥子「！……（遠くのベンチに裕之が座っているのを見つける）」
×　×　×
ベンチに座り、腕時計を見る裕之。
あたりを見回す。
×　×　×
さっと木の陰に身を隠す遥子。
恐る恐る顔を出し、裕之を見つめる。
遥子「……」
とその時、芝生からサッカーボールが遥子の足元へ転がってくる。
芝生から小学生の男の子が数人、遥子の近くへ駆け寄ってくる。
ボールを手に取り、男の子に向かって投げる遥子。
男の子たち「（元気よく遥子に）ありがとうご

ざいます！」

×　　×　　×

遠くのベンチに座る裕之が、小学生の声が聞こえた方へ何気なく目を向ける。

裕之「！（遥子の姿に気づき、立ち上がる）」

×　　×　　×

裕之が座っていたベンチの方を見る遥子。

遥子「！……（裕之がいない）」

×　　×　　×

さっきまで座っていたベンチに裕之がいない。

×　　×　　×

あわててあたりを見渡し、裕之の姿を必死に探す遥子。

とその時、裕之が少し離れたところから遊歩道を走ってくるのが見える。

二人の目と目が合う。

遥子「！……」

遥子のそばまで走ってくる裕之。

思わず後ずさる遥子。

裕之「（遥子の目を見て、穏やかに）来てくれて有難う」
遥子「あの……私――」
とっさに遥子の腕をとり、自分の方へ引き寄せ抱きしめる裕之。
裕之「何も言わなくていいよ……」
裕之、遥子をいっそう強く抱きしめる。
裕之「来てくれただけで嬉しいよ」
遥子「……（両脇の手を裕之の背中に少しずつ回す）」

○　披露宴会場のホテル・外観（昼）

○　同・控え室

ウェディングドレスを着た遥子が窓際のソファに一人座っている。
不安な面持ちで窓の外を見ている。
ドアをノックする音が聞こえる。
遥子「（我に返り）はい……」
ドアが開いて、遥子の父・恵造（68）が

入ってくる。
遥子「お父さん……」
恵造「（微笑みつつ、近づいて）きれいだよ、遥子……。母さんの若い頃をを思い出すよ」
遥子の向かいのソファに座る恵造。
遥子「ねぇ……お父さん」
恵造「……ん？」
遥子「――これで本当によかったのかしら……？」
恵造「……（一瞬、どう答えようか考え、間を取って）そのことはあれから私もいろいろと考えたよ……。裕之くんのお母さんのことを思うと、このままお腹の子のことを黙ったままでいいのか迷ってね……。でも、お腹の子が父親なく生まれてくることを考えるとなぁ……。せっかく裕之くんが戸籍上も父親になって育ててくれるというのに、わざわざ『本当は血のつながらない子です』と周囲に知らせるのはどうかと思ってね……。特に、裕之くんのお母さんにはなかな

か受け入れられないことだろうから……」
遥子「――」
ドアをノックする音が聞こえる。
遥子「はい……」
ドアを開けて裕之が入ってくる。
裕之「(恵造に気づき)あ、すみません。親子水入らずのところ、お邪魔して……(と頭を軽く下げる)」
恵造「いや、いいんだよ。ちょうどよかった。私も、裕之くんに話しておきたいことがあったから」
遥子「?――」
裕之「何ですか?話って……(と言いながら、遥子と恵造の近くに歩み寄る)」
遥子の隣りのソファに座る裕之。
何を話すのかと父を心配そうに見つめる遥子。
恵造、裕之の目を見つめてから、おもむろにソファから下り、床に膝をつく。
裕之「!……」

遥子「！……」
恵造「裕之くん、遥子をもらってくれて、本当にありがとう（床に手をついて頭を下げる）」
裕之「（慌てて床に膝をつき、恵造の腕を取る）お父さん、そんな……頭を上げて下さい」
恵造「（顔は裕之に向けるが、手は床に置いたまま動かず）実は……遥子から聞いたんだよ。お腹の子供のことを……」
裕之「！……（遥子を見る）」
遥子「（うなずく）」
恵造「遥子も本当は私にも黙っていようと思っていたそうなんだがね……。本当にこれでいいのか誰かに言わずにおれなかったみたいでね……私に話してくれたんだよ」
裕之「――そうでしたか……」
恵造「遥子は君が決めたことだから、私の胸に留めておいてくれと言うんだが、君のお母さんのことを思うとね……このまま隠しておいていいのか私も迷ってね……。ただ、

これから生まれてくる子には、この世に存在する父親がもういないことは事実だ。そして、そのことに関してその子には何の責任もないわけで……。戸籍上父親もなく生まれてくることを思うと不憫でね……」

裕之「……」

遥子「……」

恵造「いつか遥子は、君のお母さんに謝らなければならない日が来るだろう。その時は私も一緒に頭を下げるつもりだ。――君のお母さんのことを考えると、決してこれでいいとは思わんが……。裕之くん……お腹の子と遥子のこと、どうか宜しく頼みます

（頭を深く下げる）」

遥子の目から涙が溢れ出し、うつむいてハンカチを頬にあてる。

裕之「（恵造の手に自分の手を重ね）お父さん、心配しないで下さい。遥子さんとお腹の子は、僕がちゃんと守っていきますから……」

恵造「（一旦、顔を上げ裕之の目を見てから、

再び頭を下げ）ありがとう、裕之くん……
ほんとにありがとう……」

○　披露宴会場・外

裕之の母・郁子（65）、郁子の妹・光子（63）、裕之の妹・あゆみ（32）が立ち話をしている。

光子「姉さんもこれでひと安心ね、裕之くんが結婚して。あとは、孫が産まれるのを待つだけね……」

郁子「（声をひそめて）それがね……もうできてるのよ」

光子「あら……、そうだったの。よかったじゃない。最近は授かり婚といって珍しくないもの。裕之くんは奥手だと思ってたけど、結構やるじゃないの」

郁子「……遥子さんは裕之の大学時代の同級生でね、一年前くらいに再会したらしいの。それで先月、赤ちゃんが出来たから、結婚したいって裕之に急に言われて……」

あゆみ「！……（さっと顔色が変わる）」
光子「そうだったの。最近はなかなか子供ができない時代でもあるから、孫がすぐ出来るなんて喜ばなくちゃ。あ、でも、姉さんは古い考えだから、やっぱり抵抗あるのかしらね……。でも、跡取りを産んでもらえるかもしれないんだから、お嫁さんには優しくしなきゃだめよ。（夫の姿を見つけて）あっ……あなた。（郁子に）じゃ、姉さん、また後で」
　夫の下へ立ち去る光子。
あゆみ「お母さん……」
郁子「なぁに？」
あゆみ「……（言おうか言うまいか迷っている顔）」
郁子「どうしたの、あゆみ……？」
あゆみ「（言いよどむ）あのね……お兄ちゃんが遥子さんと再会したって言ってたの、２ヶ月くらい前だったんだけど……」
郁子「２ヶ月……？」

あゆみ「うん……だって、２ヶ月前くらいに
突然お兄ちゃんから花を贈るにはどうした
らいいかって電話が来たから、誰に贈る
の？って聞いたら、遥子さんと再会したか
らって、それは嬉しそうに話してたのよ」
郁子「……」
あゆみ「できちゃった婚だってわかっている
のに、どうしてお兄ちゃん、一年前に再会
しただなんて嘘ついたのかしら……」
郁子「――」
あゆみ「！――お母さん、まさか……遥子さ
んのお腹の子、お兄ちゃんの子じゃないっ
てことはないわよね……」
裕之が入ってくる。
郁子「そんな――（裕之の姿に気づく）」
裕之が郁子とあゆみの姿を見つけて近づ
いてくる。
裕之「まだこんな所にいるんですか……もう
僕たち入場しちゃいますよ」
あゆみ「（郁子に）じゃ、私、先に行くね」

あゆみ、郁子に目配せして立ち去る。
裕之「さ、母さんも早く中に入って」
裕之が郁子の腕を取るが、動かない郁子。
裕之「どうしたの、母さん…？」
郁子「――（裕之をじっと見つめる）裕之――」
裕之「何ですか……？」
郁子「――遥子さんのお腹の子は、あなたの子じゃないんじゃないの？」
裕之「！……（動揺を押し隠しつつ）何を急に言い出すんですか。僕の子ですよ、遥子のお腹の子は」
郁子「だって、あゆみがあなたと遥子さんが再会したのは2ヶ月くらい前だって言ってたもの……」
裕之「――（表情を変えず、どう答えようか考えている）」
郁子「遥子さんに花を贈りたいから、いい花屋を教えてくれって頼まれたって……あなた、まさか――」
裕之「（ふっと表情を変えて、郁子の目を見つ

め、少し強い口調で）母さん。もう一度言いますが、遥子のお腹の子は僕の子です」

郁子「裕之――」

裕之「僕は今まで、母さんの言うとおりに人生を歩んできたつもりです。言われたとおり勉強もして、母さんが望む大学にも行き、銀行にも入りました。世間で言うところのマザコンって奴です。でも、今まで歩んできた道を後悔はしていないし、母さんを責めるつもりもありません」

郁子「――」

裕之「……僕は昔から、自分というものがわからなかった。自分がどうしたいのか、何をしたらいいのか、どんな人間なのか、よくわからなかった。だから、親の敷いたレールを走っていく方が楽だったし、そのおかげで普通なら見ることのできない景色を見ることもできて、感謝しています。――でも、これからは違う。遥子との生活は僕が心から望んだものです。だから、それを

邪魔することだけは、たとえ母親であろうと、僕は許しませんよ。今日のことは、もう二度と持ち出さないで下さい。生まれてくる子供は、誰が何と言おうと、僕の子ですから」

郁子「――（何も言い返せない）」

裕之「（ふっと優しい顔になり）大丈夫。僕のことは心配しないで下さい。遥子と生まれてくる子供で幸せな家庭を築いていきますから。さぁ、もう行きましょう」

裕之に背中を押されて渋々会場内に入っていく郁子。

郁子の背中を見つめる裕之。

裕之「（ぽつりと）母さん、ごめん……」

○　披露宴会場・外・出入り口扉前

閉められた出入り口扉の前に立つ遥子。

少し離れたところから裕之が小走りでやってくる。裕之の姿を見つけて、ほっとした表情になる遥子。

裕之「ごめん、遅くなって」
遥子「ううん（小さく首を振る）」
遥子の横に立ち、「どうぞ」という身振りで腕を差し出す裕之。
そっと裕之の腕に手をかける遥子。
腕にかけた遥子の手に自分の手を重ね、ぎゅっと握る裕之。
裕之を見上げる遥子。
式場係「まもなく扉が開きます」
会場の扉が開き、スポットライトが二人を照らし出す。

○　披露宴会場・中

扉が開き、スポットライトに照らされて入場してくる裕之と遥子。
×　　×　　×
会場内の席から、複雑な表情で裕之と遥子を見つめる郁子。
そんな母・郁子の様子を窺うように見つめ、裕之と遥子に拍手を送るあゆみ。

×　　×　　×

周囲の祝福の拍手を受けながら雛壇に向かって歩いていく裕之と遥子。

終